



後  
天  
記  
略

中村俊定

文庫

中村俊定文庫  
文庫 18  
348







四季並淡句

宇都宮の神法樂摺吟  
連歌百員並淡句

抖擻雲柱撰



日の光ふもたくあはれ花鳥印吉人由可

俳諧並淡句

春之部



門書の春や相を松如飯古人立鴨  
よ少遊葉のまゝ春かゝ伊賀橋、一東  
門松ゆゑ、松よを春よを示り、元秀

其引

松雪のお中しく又抱る初春分七十二番條風  
約の足いさむ驛路の難菜分今市敵足  
虎録も子代の春や〜や小松川 維扇  
まこ〜と春を〜と春やほ〜 秀二

枯津洲や法法いぬく屠菰の口古人芦岸  
笠や〜春は春〜たり〜の色下館買中  
炭竈の烟のそ〜と〜川〜と〜高久青楓  
東の産の梅〜春〜所笠分 江山

松雪のま〜燈〜け〜初春分東都心祇  
詠歌子梅咲門〜詠 春文、正因  
初年の噴や春〜この竹のま、春武



春風や 汲み汲み 不語の声  
余のまゝ さまざな ぬ名あり 産く  
と 息

とつゝの 寂光院まゝ

書本まゝいあ 佛は 院の内 雲柱  
人の ぬいぬい 雑多り 雑子の声 秀二  
くま黒くくま 雑多りの ぬりぬり 不美  
川 芳丸 藤原 梅の 白ひ 糸 行 祇千

とつゝの 雑多り 門や 英の 梅、 逸豫  
雑子の ぬいぬい 雑多り 雑子の声 兼治 宋崎  
吹くぬ ぬいぬい 雑多りの 板 一 枝  
とつゝの 雑多り 雑多り ぬいぬい 正十  
長宗とや 田中 一の 雑多りの 色 今市 尋路  
若子や 藤の 三笠の 山 春州  
とつゝの 雑多り 雑多り ぬいぬい 條風  
とつゝの 雑多り 雑多り ぬいぬい 千又



松をくくしてくろくろくし 雁の友  
 戸尻渡るきしーのむいや 淡路島  
 田螺ふすむの 濁るも 田一枚  
 とくくくく笑ひあるとるや 枕の花  
 小の枕の花の笑ひや 只むとく  
 山をくく隔くく 相の離る  
 ぶくくくとく 深氏や 雛の鳥  
 萩足 雲柱 布克 可坂 仙石 淡花 柳原

桜やさくく 漕ちのけりり  
 きのの人の人か 初梅  
 峰ハヤシのあとのきや 月梅  
 梅咲ききくく 不詠くく  
 又あくる 春のきくく 梅  
 動くく 神のおくあや 伊世梅  
 醉山の叫んで 梅より  
 露鳩 雲洲 秀二 立鴨 蓮至 公成 於水

はとすのれほより 近き山  
 梅よりくくく 法人の西のきくく  
 梅より



奥女——女のゆくぬ山ささる 素玉

こ——斗とさひはくく老の花之卯 侘凡

花のうけさきくぬまのけあふ 垣左

花の山雨々々待るの舎 古<sup>人</sup>立躰

花元こきりありきり  
まゝくくありきり

花のこや十六日の月の顔 香二

よ——世月や

花の系おくやとありぬ吉井川 雲柱

花海をゆりて見る汐子系 杉系

諸人のえろ漕り汐子系 雲洲

あつ子の磯の海も汐子系 下<sup>館</sup>買中

芝海老の砂いりきり汐子系 信馬

まゝ魚の子いりきり汐子系 古<sup>人</sup>露谷

山部月日もくふおのきり系 今<sup>市</sup>律存

山吹や茶——汲もも花のこ—— 葵臺

まのこ是——松へ膝う藤の花 五<sup>童</sup>五<sup>童</sup>

ホ 五



安いふふれれ人にきき花の力あ終一  
 ねく身の山の名あや逢梅可  
 花の字あ梅今雪市  
 松の波あ藤之潭  
 山吹やこのの浪の直賀  
 春の日のよととと鳴や藤の花今燕市臺  
 山吹や音のこのの井の里江山

旅の山の里の音の響入  
 けの鐘の声條凡  
 けの音の響當竹  
 けの音の響素月  
 けの音の響左

夏の部  
 けの音の響の部



よしや世のたけしき老の更衣  
 秀二  
 撞きまは雨衣の鐘やほろろ  
 江山  
 一土戸や茶ののろろあつ  
 巴陵  
 五尾崎のあつや井のほろろ  
 梅林  
 里へおろ人へくろく守屋のほろろ  
 仙舟  
 おおれは汝又へ似てほろろ  
 行 越足  
 雨くろくおろのふろろ  
 下鏡 祇千  
 声もくろくおろのふろろ  
 買中

山をぬくかみく次ほろろ  
 蓼沼 經入  
 卯の花やあやハかろく  
 行 祇千  
 へおろく風の梅はほろろ  
 於水  
 坂方への鼻のほろろ  
 公成  
 卯の花やとほろろ  
 雲柱

久保田河岸の何某  
 女おろく

卯の花やほろろ  
 露長  
 友藏のほろろ  
 古く 晴月



高久 志 楓  
 志 山の日よ〜るも〜る若菜汁  
 今市 春中  
 芥の音ち〜深〜若菜山  
 志 蓮至  
 志 可足  
 若菜汁 追くは〜る若菜汁  
 可足  
 閑寺の花の果〜の梅の実  
 柳 睡  
 志 柳の子はは柳〜と〜ま〜や〜葉  
 柳 衣  
 柳 雲柱  
 柳 露鳩  
 柳 雨〜〜る〜の〜尾〜信〜の〜田〜植〜笠

柳 坂左  
 柳 田〜の〜日〜の〜山〜の〜裾〜の〜田〜の〜中  
 柳 皇  
 志 一東  
 山 江雨  
 志 宋崎  
 五月雨や乞ふも〜る〜る〜る  
 志 三潭  
 柳 露菊  
 柳 帝



蚊や火のやまの溜のころ暑ふ 今市 尋路  
 傾城の素影ありし暑ふ 行 逸路  
 凌宵や青紫のやこのほし月夜  
 空魚や紫くくまの蝶のやみ 蓼沼 五竜  
 板東門のあきや夕すきみ 今市 一枝  
 昔ふやふしほもとのを柳門 今市 箱宮  
 夕魚や空の暑さハハハハ子、 津森  
 けふのふし月小田の暑ふ 今市 素玉

黒きもきぬ鼻あり猫の鼻 一頂  
 極暑ふ神のゆる小松殿 古人 立鴨  
 風軒さだのはし陽花深し君士を、 元彦  
 小天マ一し咲くして一飲酒、 竹子  
 若竹のよ瀬よりと黒土の色、 啓章  
 櫛とぬきとぬきや下鳥を、 志汎  
 世に渡る物くまの波の月日中 條風  
 後長のもし一のむせり一森谷行 長松



六くろくや響のこゝろり船  
 向安きおん追まらぬ響もふ  
 納る代ほろりたふり神魚  
 山吹のこゝろ花咲あゝふ  
 蘇小蘇又賣も蘇あふ  
 片蔵くたくしや陸村  
 端幅く聞くはくを橋の

古  
 今市  
 江雨  
 立鴨  
 秀二  
 左  
 雲柱  
 吟水  
 千又

滋園はなかりりる星こゝろ  
 涼しきや丹辰火より夕響  
 嵐仙

東部  
 春武

丁々たる道も三條四條系  
 夏の月鳥のこゝろはくも  
 親友の形多々響や救暗の内  
 涼しき山をくくろ岩水

下飯  
 古  
 正十  
 雲柱  
 五星



ふらふらとささるる川  
暮ほくろとささるる  
蓮至  
魯汝

秋之部

秋の川や風を遠く空の柳  
萩の紫いろりきりきり秋の声  
文月の六日ゆらぬ八日ゆら  
又月やまじりの海も掃除波  
之星  
可足  
信馬  
長松

寒交の新巻

書  
あはれはつきの紙書ありて玉糸  
久月の潤はほの儲  
け秋も暑さふおの  
子の戸やぬるる家の玉糸  
子市やあめさるる小住城  
國兩の垣を造るる  
親の目も小町欲のおもひ  
雲柱  
立野  
當行  
垣左  
雲柱  
今市  
付舟



長きあしを歩くは、  
秋足

まきあしを歩くは、  
東都 正因

あしを歩くは富士の  
春武

まきあしを歩くは、  
秋水

あしを歩くは、  
立鴨

あしを歩くは、  
立鴨

光陰の交ははくは、  
嶺月

あしを歩くは、  
竹子

あしを歩くは、  
秀二

あしを歩くは、  
逸豫

あしを歩くは、  
雲柱

あしを歩くは、  
江山

あしを歩くは、  
、

あしを歩くは、  
吟水



竹の帯々々解々々野々々今市 春州  
 谷川のおきも罷り鳴子うか 津舟  
 風のよのさしれく動く鳴子か 枳谷樹野  
 虫の声挽てもゆりゆり一汲巾、里台  
 清々々野々々々々々々虫の声きん 青楓  
 糸を吐く花路々々々虫の夕今市 春州  
 鈴びりり水信ちりり禁町 香二  
 おのまゝ有々々淋々々虫の声五人 渭川

風止くて淋々々々の薄々 蓮至  
 秋々々々々々々々々々々々々々々々下飯 買中  
 灰字々々の四々々々々々々々々々今市 骨路  
 秋々々々々々々々々々々々々々々々 條風  
 控右の関の虫々々々々々々々々々 弄雪  
 名月やゆりゆりゆりゆりゆりま 元秀  
 公家亮めの上戸幾人々々の月 柳帚  
 秋々々々々月の鏡の天下一 素玉



名月ア幸崎ととも老翁夢沼す  
今市 宋崎  
きふの月川並の田と今市うふ 鶴雪  
下級 素人  
名月ア鶴伸あつる土よの下武家 連市  
江戸  
月歌を赤くす時のお食ふ武家 季邦  
荻沼 五毫  
若草戸柳子の子をえるふより  
武家  
西国をきくく動うは角力ふ 行 蒼篁  
うゝ笑う蕙と川秋の言 祇千

良栗や子あもきぬ秋の言秋部 正十  
問人もねがしうらや秋の言 一頂

酒ノ菊おたるやふ代の心あて東都 心祇

良茶のうらみ飲小くく君山 君山  
如



入おの種も〜〜ぬわら〜  
 住はのま化は暮のめ〜  
 蜻蛉の隣子さりり〜  
 声も剛〜  
 淋〜さのまら女のうい麻の声  
 う屋聞〜麻をあらぬ〜  
 濱河のふ〜  
 一〜  
 夢一  
 公成  
 雲冊  
 雲柱  
 素月  
 吟水  
 垣左

糸の菊兎の下の若亮〜  
 細の〜  
 深ゆ〜  
 け粉や日〜  
 今市  
 春州  
 燕臺  
 不  
 條凡

十五夜〜  
 蒼木花〜  
 東都  
 百菴

ホ

十五



冬之部

物の原の中へ一入りの花 露鳩  
 祓の代の今へはまきけふ 秋水  
 まろくや晴るもまきけふ 江山  
 濃田八照る月へ岩田のまきけふ 公成  
 あくのとや東海さぬ小坂まきけふ 立鴨  
 まろくのまきけふ 千又  
 山姫の待へはまきけふ 溪花

人あつて居るまきけふ 條風  
 鏡をく聞へまきけふ 梅市  
 傘持ハ移る車のまきけふ 櫻野 緑舌  
 川宮へ星のまきけふ 行 逸豫  
 毛筆色花檀とく使へまきけふ 蓼 宋崎  
 柏子木小月落るるのまきけふ 氏 嵐 志  
 風のよはまきけふ 今年 休存  
 宿疾さへぬ伯鳥のまきけふ 大古 花卜



只中の一柳子の影一落葉の影 吟水

夏心今懐ひ之くや 初 沙 東都 春成

秋又せや 舊雅より竹 如 言 下彼 大 濟

花ハ根一六根とふりて云くは 福 宣

此を吹て 風皇宮一て王 寺 古人 立 鴨

初 ちかや 佳ひ一家の室と産 雲 柱

けさ 紫さのふ 峰の紅葉ふ

土くさるや ほとん 月のさわり

古 葉や 齒肉のそけ一冬の月 一 頂

初 ちかや ちりか 梨の濡みさ 素 玉

さ 川 ちかや ちりか ちりか 揚の一とちり 素 月

さ 川 ちかや ちりか ちりか 花の 蒔 青 楓



初冬の風がしんもやまはる 衣 下領 買中  
 ちりちりや起こすふるおまの穴 阿久津 立調  
 枯木をくさす風はらやまの音 極也 霜舌  
 わくわくと梢 籠あり実さる 葵沼 五竜  
 氷川のカカキのさるさる 行 一枚  
 おのすく涼き 鏡のさるさる 今市 祇千  
 高きをあけぬ 今市 仙毫 燕臺  
 来りぬすく 結るも 浩やまを 結 霜雪

出たりぬは 結 のまや 結 露 身路

息こるるも 結 結野中 蓮至  
 秋風のまはる 結 信馬  
 るの さる 霜台  
 風や 結 垣左  
 木 結 露鳩  
 漕 結 露長



安らぐ波の閑ゆる鴨の足 官梅  
 猫の爪爪子の膝 新里 山香  
 初おのるるや菊の荒 自 秀二  
 山里くけ好さふ 孫子 五早  
 降きくくすま まのま 蓮至  
 後方の湖く まのま 以京  
 落武者の身 く 信馬  
 風く まのま 素流

一富士を爰尺 八十翁 玉祥  
 埋火く 人 條風  
 片 ま 被足  
 松片 く 秀二  
 猿の声 ま 嵐素  
 聲 ま 可夕  
 飯汁 ま



翌日ハ出々客をぬき世空の物  
 千入  
 高きく探るや梅と解さば  
 梧井  
 白妙くふふふふふふふ  
 素玉  
 送くまじ世の垢はくはくおの言  
 左  
 月日  
 白丁  
 雲柱  
 季邦  
 杉系



松賣

たり  
 や峰  
 此の書

香之白画



中一のちちり春とちりり日  
男子をちちりる人小

中一の内へ男子はめて花の春 雲柱

さだの下植凡俗春日野いりふは  
片一葉代のまゝさだまのまを土ま  
下植の標々系いりつふの句を撰  
祢ふえりハ神うまうまもまる  
うあはしりりせねあとおはは  
あは實之文の由可存りりま保  
むりけ道の標さうりりま  
ア一もまきまのふあ



又實延寢麿の今人せしむる  
れしことのおまけ入るをいふ  
さだにふくむるこのことおまけ  
お向を指し春夏秋冬のお  
あしものことおまけを  
おまけにふくむること書と  
おまけにふくむる身のおまけ  
おまけにふくむる十四季のお  
おまけにふくむる十四季のお

くちら巻を定て流のま砂の  
浦のま砂を定て流のま砂の  
寢麿八年十一月梓小ちり  
おまけにふくむる續下巻  
おまけにふくむる續下巻

宇都宮

宇都宮







